

新型コロナウイルス感染症により基盤看護学実習 I が学内実習となった 経緯と学内実習に対する学生の思い

Events leading to nursing fundamentals practicum I being taught in-school due to COVID-19 and student opinions of in-school training

高橋方子¹⁾ 富樫千秋¹⁾ 米倉摩弥¹⁾ 鈴木康宏¹⁾ 大塚朱美¹⁾

石田直江¹⁾ 菅谷しづ子¹⁾

Masako TAKAHASHI¹⁾, Chiaki TOGASHI-ARAKAWA¹⁾,

Maya YONEKURA¹⁾, Yasuhiro SUZUKI¹⁾, Akemi OTSUKA¹⁾,

Naoe ISHIDA¹⁾ and Shizuko SUGAYA¹⁾

【目的】本研究は新型コロナウイルス感染症の影響により基盤看護学実習 I が病院実習から学内実習となった経過を報告するとともに学内実習に対する学生の思いを明らかにすることである。**【方法】**学内実習となった経過は議事録をもとに作成した。学内実習を履修した看護学部1年生97人を対象とした調査は、無記名自記式質問紙による集合調査とし、量的、質的に分析した。**【結果】**A大学では感染対策や実習準備の困難、実習施設での受け入れ可否の不確かさから、病院実習を学内実習に変更した。学内実習ではあったが、おおむね実習目標を達成することができた。学内実習に対する学生の思いは『よかった気持ち』(21人)、『よかった気持ちと残念な気持ち』(26人)、『残念な気持ち』(7人)、『学内実習になったことを受け入れた気持ち』(6人)の4項目に分類された。**【考察】**今回の学内実習は新型コロナウイルス感染症の流行の中、学生の学習体勢に応じたプログラムであったことが、学生の『よかった』という気持ちをもたらしたと考えらる。一方で臨地に赴かなければ得られない学びもあり、学生の『残念』という思いにつながったと推察された。

1. はじめに

2019年12月以降新型コロナウイルス関連肺炎の発生が複数報告され、世界各国に感染が拡大した。その状況に伴う対応策は、日常生活はもとより、看護教育にも大きな影響をもたらした。我が国においても、患者数が急増し、医療供給体制が逼迫しつつあることなどから、2020

年4月7日に東京都、大阪府等の7都府県に対し、緊急事態宣言が発出された。さらに4月16日には上記7都府県と同程度に蔓延が進んでいると考えられる6道府県が「特定警戒都道府県」と指定され、それ以外の34県にも緊急事態宣言が発出された。教育においては、3月24日には文部科学省高等教育局長より通知があり、万全の感染症対策を講じることや、授業開始の判断や遠隔講義の活用などについて通知が出された¹⁾。

これらの緊急事態宣言や文科省の通知を受けてA大学では、授業開始は5月の連休明けである5月7日となり、さらに7月1日までは遠隔講義とし、演習など対面でし

連絡先：高橋 方子 mastakahashi@cis.ac.jp

1) 千葉科学大学看護学部看護学科

Department of Nursing, Faculty of Nursing, Chiba
Institute of Science Institute of Science

(2022年9月8日受付、2023年1月11日受理)

かできないものは7月2日以降に行うという方針が出された。この方針に沿い6月29日から1週間の予定であった看護学部1年生を対象とした基盤看護学実習Ⅰを7月下旬に延期した。しかし延期したものの地域の感染状況や感染の知識やPPEなど感染対策の技術が未習得であるという学生のレディネスから基盤看護学実習Ⅰを学内実習に変更する事態となった。

これまで看護学実習は臨地で行うことが前提であり、基盤看護学実習Ⅰを学内で実施した経験はない。そこで本研究は学内実習となった経緯を報告するとともに学内実習となった基盤看護学実習Ⅰに対する学生の思いを調査することとした。

II. 研究目的

本研究の目的は新型コロナウイルス感染症の影響により病院で実習するはずであった基盤看護学実習Ⅰが学内実習となった経過を報告し、学内実習に対する学生の思いと今後の実習に向けての課題を明らかにすることを目的とした。

III. 用語の定義

「思い」とは「考え、気持ち」²⁾(日本語大辞典、1989、p. 282)であることから、本研究では「学内実習となった基盤看護学実習Ⅰに対する看護学生の考えや気持ち」と定義した。

IV. 研究方法

1. 調査方法

無記名自記式質問紙による集合調査とした。

2. 調査対象者

基盤看護学実習Ⅰを履修した学生 97人(A大学看護学部1年生)

3. 調査内容

調査内容は以下の通りであった。

- (1) 属性(年齢、性別)
- (2) 感染症対策としての学内実習についての理解度
- (3) 基盤看護学実習Ⅰの到達目標の達成度の自己評価
- (4) 学内実習に対する思い

(2) から (3) の回答方法は「～できた」から「まったく～ない」の4段階で回答してもらい、(4) は自由記述とした。

4. 調査時期

2020年8月上旬(基盤看護学実習終了の2週間後)であった。

5. 分析方法

各質問項目の回答は単純集計を行った。自由記述は一人の記述を1つのデータとして扱い、学生が表現している思いをテーマとして分類した。次に学生の思いの具体

を表しているキーワードまたは文節に注目し類似しているものをまとめ、カテゴリ名をつけた。複数の教員がそれぞれ分類したものを持ち寄り、分類に相違があるものは検討し再分類をして厳密性の確保に努めた。

V. 倫理的配慮

本研究は「千葉科学大学人を対象とする研究倫理審査委員会」の承認(承認番号: R02-7)を得て実施した。対象者には、研究目的や分析方法等の研究内容、調査への参加は自由であること、参加しないことによる不利益はないこと、特に単位の取得には関係ないことおよび調査用紙の提出を以て研究参加の同意とすること、統計処理をした結果を公表することなど研究参加における自由意思と同意の示し方および研究結果の公表時の匿名性確保について研究説明書と口頭で説明した。

対象が学生であることから、研究の説明と回収は単位認定者でない研究者が行い、研究者は研究について説明する前に学生に単位認定者でないことを伝えた。回収ボックスは講義室の出口に設置して対象者の研究協力状況をチェックしないようにした。また出口の回収ボックスへの提出が強制であると受け取られないよう事務室のメールボックスでも可能であることを対象者に説明し、研究協力の自由意思に関して特に配慮した。

VI. 基盤看護学実習について

1. 基盤看護学実習Ⅰについて

基盤看護学実習Ⅰは看護学部1年生を対象として毎年7月初旬に実施される見学実習である。2020年度は6月29日から7月3日に実施する予定であった。実習の目的は「看護実践が行われている場について見学し、看護師の活動の場の特徴ならびに看護の役割、およびヘルスケアチームの連携について学ぶ。また、看護師と行動をとることにによって、健康の段階に応じた看護活動の特徴、および生活援助行動について、看護の役割機能について学ぶ。」である。また到達目標は以下の項目である。

- (1) 病院の機能および概要を理解できる。
- (2) 看護師の活動と役割の実際を知り、役割について理解できる。
- (3) 入院している患者の療養環境と生活状況を理解できる。
- (4) ヘルスケアチームと看護師の連携を理解できる。

2. 基盤看護学実習Ⅰが学内実習となった経過

基盤看護学領域では、教員7名で毎週、領域会議を開催している。その会議において基盤看護学実習Ⅰの検討を行った。新型コロナウイルス感染症の流行の中での実習は初めての経験であり「病院で実習ができるか」、「学内の実習となった場合にどのような実習にすればよいか」「病院での実習が学内実習にするかの判断の根拠は何

か「感染対策はどうすればよいか」など悩みながら検討を重ねた。以下、基盤看護学実習Ⅰ（病院）を「病院実習」、基盤看護学実習Ⅰ（学内）を「学内実習」とする。

具体的には2020年3月12日の会議において2月28日付の「新型コロナウイルス感染症の発症に伴う医療機関関係職種等の各学校、養成所および養成施設等の対応について」³⁾の実習時期や実習施設の変更、実習中止に関する指針を確認し、予定している日程では実施ができない可能性や学内実習になる可能性を確認した。

4月9日から病院実習を行うことを前提に様々な検討を行った。まずは、教務課や実習施設と調整を行い、6月29日から7月3日の期間を7月22日から7月26日に延期した。一方で実習期間を延期したとしても、入学した学生が大学に通学を許可されるのは7月からであり、抗体検査や予防接種、ユニフォームの購入が間に合わないこと、感染予防の講義やPPEの演習を組む時間の確保の困難さなど病院で実習を行うには様々な課題があることが検討の過程において明らかになっていった。

また、実習期間の延期の調整は行えたものの、実習施設の受け入れの可否は不確かで、実際に実習の受け入れが可能との連絡があったのは3つのうちA病院だけであり、病院からの連絡を待つという状況が続いた。病院実習をすることを前提に検討を重ねてきたが、5月15日の会議において病院で実習するには準備が厳しいこと、延期した実習期間までおよそ2か月となり、学内実習となった場合の準備に時間を要することから、苦渋の選択として、病院実習を取りやめ学内実習とすることを決定した。

学内実習に関しては病院実習を前提としながらも4月9日から学内実習の方針などについて少しずつ検討を行ってきた。5月15日の学内実習への移行を決定してからは、文部科学省からのガイドラインを参考にしつつ、具体的な学内実習の構築と調整にはいった。5月22日は「学生への連絡方法や説明内容」「学内実習要項の検討とそれに対応するプログラム」を、5月28日には「学生への実習要項の配布や説明」「外部講師との調整」「学内実習の限界と補足」、6月4日には「外部講師や非常勤の実習指導教員の謝金等」、6月12日は「学内での実習指導教員の役割など実習の詳細」、6月18日は「学内実習における感染対策」を検討し、学内実習の準備を整えた。基盤看護学実習Ⅰを学内実習とした経緯の詳細は表1に示した。

3. 基盤看護学実習Ⅰ(学内)のプログラム

学内実習の方針は「実習体制や病院実習でのねらいや達成目標を可能な限り変更せずにプログラムを組む方針を立て、講義とカンファレンスで構成した。

学内実習ではあったが、学生を5人程度のグループに分けてグループごとに実習指導教員を配置し、グループ

全体にとどまらず個別の状況に合わせて指導ができる実習体制をとった。そして学生は体温や健康状態を実習指導教員に報告してから講義に臨み、毎日カンファレンスを実施してその日の学びを深めることとした。

病院実習のねらいは看護師の後に従い看護実践を見学することにより、学生自身で感じ考えて、初学者なりに自身の看護観を育み、今後の様々な科目を学習する必要性や将来の自分の姿を描くことにある。そのため講師は入院経験のある教員と実習病院の看護職に依頼し、講師にはあらかじめ到達目標および学生にとって初めての実習であることを伝えて、可能であれば映像や事例を取り入れていただきたいとの要望を伝えた。また学生が学びを積み重ねやすいように講義の順序を工夫した。学内実習1日目に学生が共感しやすい患者の気持ちや求める看護に関する講義を、2日目に病院という施設の全体像および看護の役割の総論を、3日目はより具体的に病棟のスタッフナースから看護活動の実際や多職種との連携についての講義を配置した(表2)。

感染対策としては、3密を避けて席に座ることができるよう講義は大教室を使用し、カンファレンスは2つの教室を確保した。万が一新型コロナウイルス感染症が発生した場合に追跡しやすいように座席は固定とした。またマスク着用は必須とし、入室前後の手指消毒と換気を徹底するとともに各教員に消毒セットを配布して、退出時に机など使用した場所の消毒を行った。

Ⅶ. 調査結果

97人のうち69人から回答があった(回収率は71.1%)。

1. 対象者の属性

対象者は女性59人(85.5%)、男性9人(13.0%)、無回答が1人(1.4%)だった。年代は18歳が42人(60.9%)、19歳以上が22人(31.8%)、無回答が5人(7.2%)だった(表3)。

2. 感染対策に伴う学内実習への変更の理解

感染対策に伴う学内実習への変更の理解に関しては、「理解している」、「まあまあ理解している」を合わせると68人(98.6%)とほとんどの学生が理解していた(表4)。

3. 実習目標の達成度の自己評価

実習目標の到達度の自己評価は「達成できた」、「まあまあ達成できた」と回答した人は「病院の機能および概要を説明できる」は65人(94.2%)、「入院している患者の療養環境と生活状況を理解できる」は67人(97.1%)、「看護師の活動と役割について説明できる」は66人(95.7%)、「ヘルスケアチームと看護師の連携を説明できる」は65人(94.2%)であった(表5)。

表1. 基盤看護学実習Ⅰに関する検討の経緯

日付	主な論点	検討項目	決定・確認・検討内容
2020年 3月12日	病院実習ができない可能性と学内実習になる可能性の共通認識	病院実習	・病院実習ができない可能性があることを共有した。
		学内実習	・学内実習になる可能性があることを共有した。
		※参考にしたガイドライン・連絡	・文科省・厚労省：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所および養成施設等の対応について（2020年2月28日）3
4月9日	病院実習を行う方向で調整する（実習日程の延期により）	病院実習	・実習は実施したいため延期の方向で希望を教務課に提出することを決定した。 ・実習延期の希望は7月20日の週か7月27日の週とする。 ・実習病院の意向を確認する必要があることを共有した。
	学内実習になった場合の教員の認識の共有	学内実習	・実習の方法が変わっても実習目標を達成させる方針を決定した。 ・実習が中止となった場合、臨床現場の看護師、CNS教員に講義を依頼してはどうかという案がだされた。 ・A病院に講師派遣の協力を依頼できる可能性があることが報告された。
4月17日	病院実習を行う方向で調整する（保険の確認など）	病院実習	・学生の保険について新型コロナウイルス感染症に対応しているかについて検討した。
		※参考にしたガイドライン・連絡	・基盤看護学実習に関する近隣の大学の状況に関する情報を共有（他大学でも延期や中止をするところと様々）した。
4月23日	病院実習を行う場合に必要準備の検討	病院実習	・ユニフォームの注文が間に合わないため服装をどうするか。 ・抗体検査の時期をどうするか。 ・実習指導教員のオリエンテーション、学生オリエンテーションの準備はどうか。 これらの具体的な対策は次回検討するが、病院実習は難しいとの見通しを共有した。
	学内実習になった場合の教育方針等の共有	学内実習	・学内実習でも内容は実習目標にそって決め、様々な現場の話が聞けるようにする方針を決定した。 ・学生自身が考えるプログラムにするという方針を決定した。 ・DVDを使用する場合は既存のものを使用することを確認した。
5月8日	病院実習を行う場合の準備	病院実習	・実習に行く場合の服装はユニフォームができていないことを実習病院に報告しポロシャツ等に対応することを決定した。 ・抗体検査は実習までには間に合ってもその後の予防接種をする時間がとれないことが明らかになった。
		学内実習	・大学は現時点では7月の実習は可能と判断していることを確認した。 ・実習施設では3病院のうちA病院のみが受け入れ可であるが、ほかの2病院は不明であることが報告された。 ・5月14日に出される国や県の方針を受けて再度検討することを決定した。
5月15日	病院実習の中止	病院実習	・病院実習は中止とし7/20から7/22に学内実習とすることに決定した。 ・実習指導を依頼していた非常勤教員は学内実習でも依頼することを決定した。
	学内実習への切り替えの決定	学内実習	・学内実習計画については次回会議で検討することとなった。
5月22日	病院実習の中止の連絡学生に対する連絡方法や説明内容	病院実習	・実習Ⅰについて実習施設に中止のメールと公文書を送付することを決定した。 ・学生への連絡は5/26ポータルサイトで告知をすることを決定した。 ・基盤看護学概論の授業の際に教員から学生に詳細を説明す
		学内実習	・学内実習の具体的な内容を検討して要項を作成した。 実習の方法が変わっても実習目標を達成させる方向で学内実習を組む 実習目標に沿って日ごとにテーマを決める。 外部講師にテーマに沿って講義内容を依頼する。 外部講師は実習施設の看護部長、看護師など実習病院に依頼する。 記録用紙は病院実習の場合と同様とする。 学内実習場所について広い講義室を借りる。
		※参考にしたガイドライン・連絡など	5月20日付にてB実習病院から県内に緊急事態宣言が発令中の実習生の受け入れは不可との公文書が届いた。 文科省・厚労省：新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所および養成施設等の対応について（2020年2月28日）3 遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取扱いについて（2020年5月1日）5 文部科学省：新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等における教育研究活動の実施に際しての留意事項について（2020年5月15日）4
5月28日	学生への実習横の配布と説明	学内実習	・実習要項の配布など学生への連絡方法と内容を検討した。 6月の看護学概論の終了後に実習要項を学生に配布し、実習期間、自己学習の日、健康診断のあることを説明する。 7月の解剖生理学の講義後に実習記録用紙と健康チェック表を配布する。 事前学習、実習初日の集合や持参するものなど、実習の全容が見える形になったらポータルサイトに載せる。 ・外部講師の依頼と承諾および日程調整を検討した。 3日目「看護師の活動と役割」について、0病院の総看護部長に依頼することができた。 A病院に講師依頼は済んでおり返事を待っている。 A病院の講師が決定次第、他の講師の依頼をかける。
	学内実習の限界と補足など		・基盤看護学実習Ⅰ（学内）で実施可能な内容および実施できない内容の振替を整理した。 身だしなみユニフォームの着用については基盤看護技術論Ⅰで実施する。 実習目標、行動計画は基盤看護学実習Ⅰ（学内）で記録を書く。 報告・連絡・相談については基盤看護学実習Ⅱで実施する。 患者からの情報収集は基盤看護学実習Ⅱで実施する。 学生カンファレンスは基盤看護学実習Ⅰ（学内）で実施する。 基盤看護学実習Ⅰ（学内）で発表を行いまとめた体験をする。

表 1. 基盤看護学実習 I に関する検討の経緯 (続き)

日付	主な論点	検討項目	決定・確認・検討内容
6月4日	外部講師や非常勤の実習指導教員の謝金	学内実習	<ul style="list-style-type: none"> ・学生の実習前健康管理として、検温と健康チェックを7月4日より開始することに決定した。 ・基盤看護学実習 I の講師、非常勤講師の人数や謝金について学部長に報告する。 ・A病院に学内実習要項等を持参し説明に伺い、講師の人選をお願いする。
6月12日	学内での実習指導教員の役割など実習の詳細の検討	学内実習	<ul style="list-style-type: none"> ・学内実習 I の詳細を検討した。 実習記録(日々記録)は、朝提出後、コメントを入れ当日返却する。 カンファレンスは実習要項の到達目標がその日のカンファレンステーマとする。 実習指導教員の依頼に感染予防のお願いと感染に関する理由による実習指導の不参加は可とすることを追加する。 感染予防のため従来のような対面での教員オリエンテーションは実施せず、実習要項、お願い文、実習で行って欲しいことについて文書化し依頼する。 実習要項Ⅶの履修上の注意にコロナ感染予防の注意事項を入れる。 個別面接は実施するが、感染対策のため面接時間は10分程度とする。 座席表は感染予防の視点で作成する。
6月18日	学内実習における感染対策の検討	学内実習	<ul style="list-style-type: none"> ・講師、実習指導教員にお願いしたいことに感染対策として体温測定、マスクの着用などを加える。 ・新型コロナウイルス感染症が発生した際に感染者が追跡しやすいように使用する教室は、2部屋にし3日間固定とする。 ・廊下にアルコール設置と換気の徹底、登下校時各部屋入退出時に手指消毒と机などをアルコール消毒をして対応する。 ・実習時の学生からの連絡は大学既定のルートで行う。学生は「新型コロナウイルス感染症状有」の場合は健康管理センターに連絡し、他の理由で欠席する場合は学部事務室に連絡する。学生が欠席で連絡がない場合は健康管理センターに確認する。

表 2. 基盤看護学実習 I (学内) プログラム

日程	内容	講師
7月20日	ガイダンス	
	講義① 患者の療養環境と生活状況	入院経験のある教員
	講義② 患者の療養環境と生活状況	入院経験のある教員
	カンファレンス・各グループの学びの発表・実習記録の整理	
7月21日	講義③ 病院の機能および概要	実習病院 看護局長
	講義④ 看護師の活動と役割	実習病院 看護部長
	カンファレンス・各グループの学びの発表・実習記録の整理	
7月22日	講義⑤ 看護師の活動と役割	実習病院 看護師(主任)
	講義⑥ ヘルスケアチームと看護師の連携	実習病院 看護師(主任)
	カンファレンス・各グループの学びの発表・実習記録の整理	
7月23日 24日	自己学習(学びのまとめ、レポート課題)	

表 3. 対象者の属性

		n=69	
項目	選択肢	人	(%)
性別	女	59	(85.5)
	男	9	(13.0)
	無回答	1	(1.4)
年代	18歳	42	(60.9)
	19歳以上	22	(31.8)
	無回答	5	(7.2)

表 4. 感染対策に伴う学内実習への変更の理解

		n=69	
	選択肢	人	(%)
	理解している	59	(85.6)
	まあまあ理解している	8	(11.6)
	まったく理解していない	1	(1.4)
	無回答	1	(1.4)

表 5. 実習目標の到達度の自己評価

項目	達成できた		まあまあ達成できた		あまり達成できなかった		達成できなかった	
	人	(%)	人	(%)	人	(%)	人	(%)
病院の機能および概要を説明できる	27	(39.1)	38	(55.1)	2	(2.9)	2	(2.9)
入院している患者の療養環境と生活状況を理解できる	39	(56.5)	28	(40.6)	0	(0.0)	2	(2.9)
看護師の活動と役割について説明できる	41	(59.4)	25	(36.3)	1	(1.4)	2	(2.9)
ヘルスケアチームと看護師の連携を説明できる	30	(43.5)	35	(50.7)	3	(4.3)	1	(1.4)

n=69

4. 学内実習についての学生の思い

学内実習の感想は60人の学生が記述していた。学生が表現している思いのテーマは『』で示し、カテゴリは<>、データは「」で示した。学生が表現している思いは『よかった気持ちを表現しているもの』(21人)、『残念な気持ちとよかった気持ちの両方を表しているもの』(26人)、『残念な気持ちを表現しているもの』(7人)、『学内実習になったことを受け入れた気持ちを表現しているもの』(6人)の4項目に分類された。

『よかった気持ちを表現している』内容は、「今回の実習を通して自分の知らない看護の知識を学ぶことができた」、「学内でも勉強になったことがたくさんあったのでよかったと思います。」のように<学びが多かった>ことが述べられていた。また「実習先の病院の方が講義した内容を聞いているとその病院で実習してるみたいと感じたい内容が知れたので学内実習でも良かったなと感じました。」のように臨地を感じられたことについても述べられていた。ほかには「私たち自身でカンファレンスを行うことでしっかりと実習で学んだことを理解することができて良かったです。」や「慣れた環境で実習を行え、ストレスを感じないまま終えられてよかった。」のように意見交換ができたことや緊張せずに学習できたことが述べられていた。

『残念な気持ちとよかった気持ちの両方を表現しているもの』に関しては「実際に病院に行きたい気持ちもあったが学内演習だからこそ学べたこともあるので良かった。」と残念な気持ちとともに学内実習で学べたことが述べられていた。また「病院と学内では感じる緊張感や状況も異なるため次回実際に病院に行つて活動をさせていただく際への不安はあったが、講師の方々が病院の臨場感を感じさせてくれるような講義をして下さり想像以上に満足できた」のように不安や残念な気持ちとともにより実践に近い講義が受けられたと感じた学生もいた。ほ

かにも「病院での実習がなくなったのは残念だったが学内で実習を行ったことでカンファレンスに力を入れることもできたし、みんなの意見をたくさん聞くことができて勉強になった。」「病院での実習ができなくなったけど、看護師のお話などを聞いて看護師になりたいという思いが強くなった。」のように残念な気持ちとともに意見交換ができたことや看護師になる意欲が高まったことが述べられていた。また、「実際の医療現場で働いている方のお話が聞けてとても勉強になりました。実習は本当は病院で体験学習させていただきたかったのでコロナウイルスのせいでとても残念だった」、「学内実習で行くことの意義は理解できた。良い内容だったと思う。しかし、コロナウイルスなのでしかたがないとは思いますが病院で見たものの感じたものが1年次でまったくないのは少し悲しかった」とよかった内容も述べられていたが、病院で実習ができなかった無念さが表現されていた。

『残念な気持ちを表現しているもの』では「すごく残念に思いましたが自分のため病院のため患者のためにも実習を病院で行えなくなったことは良い判断だと思いました。でもそれなりに学校内でも実践をしたかったというのが本音です。聞くだけカンファレンスするだけだったのでアウトプットの実践をしたいです。」や「実際に病院に行つて学びたかったというのが本音です」と実習したかった気持ちが述べられていた。

『学内実習になったことを受け入れた気持ちを表現しているもの』に関しては「実際に病院で患者さまにお会いできることを楽しみにしていたが学校側、病院側の安全を守るためには仕方ないことだと理解している。」や「学生が病院に足を運び実習をすることが感染のリスクが高まる可能性を考えての学内実習への変更だったと思うので特に不満などはなかった。」のように感染のリスクから学内実習への変更は当然もしくは仕方がなかったと述べられていた。詳細は表6に示した。

表 6. 基盤看護学実習 I (学内) についての学生の思い

n=60

学生の思い	カテゴリ	記述内容
よかった気持ち を表現している もの	学びが多かった	今回の実習を通して自分の知らない看護の知識を学ぶことができた
		元から知っていることをさらに詳しく学ぶことができた
		改めて看護について知ることができこのような実習もよいと思った
		普段授業を受けているとわからないことや経験できないことができたので良かった
		学内でも勉強になったことがたくさんあったので良かったと思う
		次に病院で実習をするときに必要な事を学ぶことができたので学内の実習で良かったと思いました
		学内であったが講義を通して理解することができた
		少しでも密にならないように気を使って良かったと思った。学内実習でも学べることはたくさんあった
		病院実習には行けなかったが講義でたくさん得られたものがあった
		病院の実習に行ったことがないので細かいことはわからないが貴重な体験だった
よかった気持ち を表現している もの	臨床を感じるこ とができる講義 だった	始めはどの様な事をやるのかと思っていたが実習先の病院の方が講義した内容を聞いていてその病院で実習して るみたいと感じ知りた内容が知れたので学内実習でも良かったなと感じた
		学内実習だったが本番に近い形でできたので良かった
		いろいろな視点と経験を多く持った方々の話を聞くことはなかなかできないことなのでとても学べた実習だった
		周りの人たちから様々な意見を聞くことができた
		私たち自身でカンファレンスを行うことでしっかりと実習で学んだことを理解することができてよかった
		コロナウイルスが拡大していく中、学内で良かったと思った。初めてのグループワークも良い経験になった
		学内実習を行ったことによってコミュニケーションや自分の意見を言い合えることができたので良かった
		学内だったので緊張しなかった
		慣れた環境で実習を行えられストレスを感じないまま終わられてよかった
		思ってもいませんでしたでしたが楽しかった
よかった気持ち を表現している もの	楽しい	講義がわかりやすかった
		病院実習を楽しみにしていたので少し残念だったが次の病院実習で知識を持った状態で臨めるのはいいことだと 思った。知らないことがたくさんあったので知ることができてよかった
		実際に病院に行きたい気持ちもあったが学内演習だからこそ学べたこともあるので良かった
		病院の雰囲気を見ることはできなかったが講義の内容が詳しくかった
		最初は学内実習と聞いて残念に思っていたがとても学びの多い実習になったと感じた
		院内でないのではどのような感じで行われるか心配だったが先生方が詳しく教えて下さったため理解できた
		学内で実習を行うことで病院などの施設を身をもって学べることは少なかったが話をたくさん聞いたのは利点だと 感じた。
		学内での実習では病院実習より劣っている実習になるのではないかと考えていた。しかし、話を聞く中で想像して いたものとは違い病院について深いところまで話を聞くことができたと思った。全てが実習として実践できるもの ばかりではないことに気づき来年の実習の準備ができる期間になると考えた
		とても今後のためになるようなお話をきけてよかった。院内実習だったならどういった実習になっていたのだろう と思った
		病院でできる実習とは違ったけど学内でも学べることが多く勉強になった
残念な気持ちと よかった気持ち の両方を表現し ているもの	病院での実習で はなかったが臨 床を感じるこ とができる講義 だった	始めは校内でも大丈夫なのか少し不安だった。しかし、すばらしい講義を聞きとてもためになる時間だった
		本当のことを言うと病院で実習を行いたかったが、病院の看護局長などのお話が聞ける機会はありませんと思うの でとても良い機会になった。
		学内実習だったけれど看護師さんたちの生の声を聴くことができ良かった。これからの勉強につなげていきたい
		病院ではなかったけど患者側になった人たちの話をきくことができたり病院内の知らなかったことがたくさん知 れたので良かった
		病院と学内では感じる緊張感や状況も異なるため次回実際に病院に行って活動をさせていただく際への不安はあっ たが講師の方々が病院の臨場感を感じさせてくれるような講義をして下さり想像以上に満足できた
		実際の医療現場で働いて方のお話が聞けてとても勉強になった。実習は本当は病院で体験学習させていただき たかったのでコロナウイルスのせいでとても残念だった
		自分で実際に行っているなどはなかったけど学内でやったことによってグループ内で意見交換をしっかりと考 えていることを発表でき良い経験だった

表 6. 基盤看護学実習 I (学内) についての学生の思い (続き)

学生の思い	カテゴリ	記述内容	
病院実習ではな いのは残念だ たが意見交換が できた		病院で実習がなくなったのは残念だったが学内で実習を行ったことでカンファレンスに力を入れることもできた みんなの意見をたくさん聞くことができて勉強になった	
		学内実習になったことは残念だったがグループワークを通していろいろな人と話せてよかった 実習というよりは授業内でのグループ活動という感じだったが講義で学んだことや感じたことなどをグループメン バーと共有できたことは良かった	
		病院での実習を楽しみにしていたがこの状況下の中で学内で実習を行えたことはとても良い経験だったと思った	
		学内での実習ということで実際に病院で行うことができなかったのは残念だなと思った。しかし、先生方の工夫に より充実したものとなり良かった 少し物足りなかったが満足いく実習でできた コロナウイルスの影響で学内で行うこととなったが講義がわかりやすいと感じたために不満はなかった	
残念な気持ちと よかった気持ち の両方を表現し ているもの		病院での実習ができなくなったけど、看護師のお話などを聞いて看護師になりたいという思いが強くなった	
		院内実習ではなかったが感染対策がしっかりしており安全に学習することができた 学内実習で行うことの意義は理解できた。良い内容だったと思った。しかし、コロナウイルスなのでしかたがない とは思いますが病院で見たもの感じたものが1年次でまったくないのは少し悲しかった すごく残念に思ったが自分のため病院のため患者のためにも実習を病院で行えなくなったことは良い判断だと思っ た。でもそれなりに学校内ででも実践をしたかったというのが本音だ。聞くだけカンファレンスするだけだったの でアウトプットの実践をしたかった	
		病院でやりたいという気持ちがあった。どんな感じで実習を行うか不安があった 病院に行けないため病院の雰囲気わからなかった 少し寂しい気持ちになった。病院で受けたかった 実際に病院に行って学びたかったというのが本音だ	
		初めての实習が学内実習になってしまったことに戸惑いがあった。講義だけでは病院の実感を理解しがたい部分も あり上手にまとめることができなかった 初めての实習だったから正直実際に病院でやっていた。話を聞くだけでも十分学べたがやっぱり目で見て体験す るのに比べたら少し足りないと感じた 病院の実際に雰囲気を感しながらの講義であつたらもう少しこれからのことを想像できたかもしれないと思っ たが学内でやることで関わる全ての人の安全を守ることにつながったのではないかと考えた コロナが流行しているので学内実習で正しいと思った	
残念な気持ちを 表現しているも の	病院で実習を行 いたかった	初めての实習が学内実習になってしまったことに戸惑いがあった。講義だけでは病院の実感を理解しがたい部分も あり上手にまとめることができなかった 初めての实習だったから正直実際に病院でやっていた。話を聞くだけでも十分学べたがやっぱり目で見て体験す るのに比べたら少し足りないと感じた 病院の実際に雰囲気を感しながらの講義であつたらもう少しこれからのことを想像できたかもしれないと思っ たが学内でやることで関わる全ての人の安全を守ることにつながったのではないかと考えた コロナが流行しているので学内実習で正しいと思った	
		学内実習への変 更は当然である	学生が病院に足を運び実習をすることが感染のリスクが高まる可能性を考えての学内実習への変更だったと思うの で特に不満などはなかった 病院でやっていたので残念だったが今の現状無理だと思った 実際に病院で患者さまにお会いできることを楽しみにしていたが学校側、病院側の安全を守るためには仕方ないこ とだと理解している には仕方がない コロナ感染が拡大しているから仕方がないと思った。ただ講義を聞いたうえでやはり聞いただけではわからないだ ろうなという内容もあった
		安全を守るため には仕方がない	学内実習への変 更は当然である
			学内実習への変 更は当然である

Ⅷ. 考察

1. 実習目標の達成度について

実習の到達目標は「(1) 病院の機能および概要を理解できる。(2) 看護師の活動と役割の実際を知り、役割について理解できる。(3) 入院している患者の療養環境と生活状況を理解できる。(4) ヘルスケアチームと看護師の連携を理解できる。」の4項目であった。学生の自己評価ではどの項目も94%以上の学生が「達成できた」、「まあまあ達成できた」と回答し、実際の成績もほとんどの学生が「秀」または「優」であった。学内実習ではあったがおおむね実習目標は達成されたと考えられた。

2. 学生の学内実習に対する思い

学生の思いから、学生はよかったという思いと病院で実習をしたかったという残念な思いの両方があり、学生

によってどちらかが強く表現されているのではないかと推察される。この学生の思いを近年学校に限定されない多様な場における学習を理解する概念として注目されている「正統的周辺参加」(Legitimate Peripheral Participation: LPP)から考察する。

LPPとは「学習者が熟練者の実践活動に参加はするものの、それはごく限られたレベルであり、しかも最終的な産物に対しては、ごく限られた責任しか負わないという独自の関与のあり方」であり、この観点から学習は「ゆるやかな条件のもとで実際に仕事の過程に従事することによって業務を遂行する技能を獲得していく」過程であるとされる⁶⁾。看護学実習は専門的知識・技能を学習し始めたばかりの学生が看護師の指導のもとに病院において看護師の物の見方や感じ方、患者へのケアなどを学ぶ

ものであり、このLPPの典型の1つであると考えられる。一方でLPPの眼目は、いきなり集団の核に学習者を置くのではなく、学習者の知識・技能に見合った参加の度合いを「ゆるやかに」進め、その過程において段階的に学習を進めていくことにある⁷⁾。コロナ禍において通常の大学生活を送ることができないという状況は、初めての大学生活に対する不安をさらに大きくしていると推測される。加えて感染防御の知識や技術も習得していない学生の準備状況をふまえると、今回、病院ではなくまずは大学という環境で実習を開始したということは、感染対策のみならず、新型コロナウイルスの流行下で変更を余儀なくされた学生の学習態勢に対応するという積極的な意味があったと考える。初めて同級生と顔を合わせ、感染対策をした安全な環境で、患者・看護師が臨床の知について学生に語るという体験が「学びが多かった」「臨床を感じることができる講義だった」など学生のよかったという達成感をもたらしたと推察される。

達成感の一方で、学生の多くが残念な気持ちを持っていた。基盤看護学実習は後続する領域別看護学実習に比べ、具体的な知識・技能を学習・教育するというよりも、その基礎となる看護師としての振る舞いや患者との関わりを通して看護観の基礎を培うことを目的とするものである。これらの学習内容は、看護師の「暗黙知」⁸⁾に関わるものであり、言語コミュニケーションで伝えることが困難なものである。多くの学生が達成感を持った一方で、病院で実習を行うことができなかったことについて残念な思いがあるということは、こうした基盤看護学実習 I の学習内容という特性からも理解できる。

今回の学内実習では、感染状況の中での学生の知識・技能に見合った参加の度合いで、臨床の知に触れる機会を設けたことにより、学生が看護学実習としての学びを感じることができたと考える。一方で学生が病院に身を置くこと、それ自体が学習において大きな意味があるということが改めて示唆されたと考える。

Ⅷ. 結論

- 1) A 大学では新型コロナウイルス感染症の影響により 6 月下旬に予定していた 1 年生を対象とした基盤看護学実習 I を 7 月下旬の学内実習に変更した。
- 2) 学内実習ではあったが、おおむね実習目標を達成することができた。
- 3) 学生それぞれが学内実習でもよかったという思いと病院で実習をしなかったという残念な思いの両方を抱えていた。
- 4) 今回の学内実習は新型コロナウイルスの流行下で学生が安心感を持って臨床の知に触れることが可能となり、学生によかったという気持ちをもたらしたと考えらる。一方で、臨地に赴かなければ得られない学びに対して、

学生は残念という思いを抱いたと推察された。

謝辞

本研究にご協力いただいた A 大学看護学部 1 年生に感謝申し上げます。またまた学術的助言者として貢献していただいた長崎大学教育学部 准教授 山岸利次先生に深謝申し上げます。

利益相反の開示

本研究における利益相反は存在しない。

著者貢献度

すべての著者は、研究の構想およびデザイン、データ収集・分析および解釈に寄与し、論文の作成に関与し、最終原稿を確認した。

引用文献

- 1) 文部科学省. 令和 2 年度における大学等の授業開始等について (通知), 2020.
https://www.mext.go.jp/content/20200324-mxt_kouhou01-00004520_4.pdf (参照 2020/4/1).
- 2) 梅棹忠夫, 金田一春彦, 阪倉篤義, 日野原重明: 日本語大辞典, 講談社. 東京, 282, 1989.
- 3) 文部科学省, 厚生労働省: 新型コロナウイルス感染症の発生に伴う医療関係職種等の各学校、養成所および養成施設等の対応について (2020 年 2 月 28 日).
http://www.japanpt.or.jp/upload/japanpt/obj/files/info/contact_2_200302_20200602.pdf (参照 2020 年 3 月 15)
- 4) 文部科学省: 新型コロナウイルス感染症の状況を踏まえた大学等における教育研究活動の実施に際しての留意事項について (2020 年 5 月 15 日).
https://www.mext.go.jp/content/20200518-mxt_kouhou01-00004520_1.pdf (参照 2020/5/15).
- 5) 文部科学省高等教育局大学振興課: 遠隔授業等の実施に係る留意点及び実習等の授業の弾力的な取扱い等について (2020 年 5 月 1 日).
https://www.mext.go.jp/content/20200501-mxt_kouhou02-00004520_3.pdf (参照 2020/5/15).
- 6) J. レイプ&ウエンガー/佐伯胖: 状況に埋め込まれた学習, 産業図書. 東京, 7, 1993.
- 7) 前掲書 6), 12-19.
- 8) 村上成明: 看護実践の知識伝授プロセスにみられる暗黙知伝授の有用性の検討. 日本看護管理学会誌, 9 (2), 50-57, 2006.